

紅い花

(十四) 突然の策

琉 紅

(十四) 突然の策

突然、本部平原は賢龍に進言した。

「明日の朝一番に、騎兵を中心に、決死隊を整え、正面から敵の本陣へと攻撃をするのです、尚巴志さえ仕留めれば、こちらの勝ちでしょう。北山の騎兵隊が最強なことを示すのです」

賢龍の心を鼓舞し続け、

「美久様は、策を練られて、木造で何かを作られているようですが、このような戦法は時間がかかり、この城が持ちません」

「確かに、そちの言う通りじゃ。私の判断で進める。時間がない。後で、美久に伝えればよからう」

美久は伝達兵、その他、弓矢隊、各隊長と戦略を練っていた。さらには、木材を並べて車のような台車を極秘に、西の倉庫内で作らせていた。

次の日、まだ日が昇るか否かの青白い光の中で、第一の城壁の中庭にて、騎兵隊を中心に部隊が形成された。

それを見た美久は慌てて、賢龍に近寄る。

「賢龍様、なぜ、この様な大部隊の準備をするのですか。私

は指示した覚えがありません」

「いいか、このままではいずれ、我らは力負けしてしまう。それは美久も言っていたではないか」

「ええ」

「なら、今こそ打って出るのだ、早朝決戦だ」

「いいえ、城の中で兵を動かすから、こちらが勝っているのです。外に出れば、数の論理で、あっという間に負けます」
「だから、馬で駆け抜けるのじゃ。我々は琉球随一の騎兵隊だ。海賊と戦った事もある」

「では、城は、別の方向から攻められたら？」

「本部平原が守っておる。大丈夫じゃ」

美久は本部平原の目を凝視する。一瞬であるが、本部は目をそらした。

(まさか)

美久は不安を覚えた。

しかし今、賢龍にそれを伝えても何も根拠が無く、一掃されるだけだと思った。

「わかりました。では、私も一緒に行きます」

「なにを言う、危ないところに連れて行けるか」

「私は北山の軍師です」

美久は賢龍の目をじっと見て、

「ここから平地へは、指揮伝達が遅い。それに、伝達兵も同時にやられたら、うまくいきません。私が下に降ります」

久高島で聖城への立ち入りを制したときと同じ目であった。そうなる、言うことを聞かないことを賢龍は感じ取った。

賢龍は美久を連れて、本丸の倉庫へ入った。

「ここには、父が集めた大和の戦の道具が揃っている。この中に甲冑もあるぞ。多少重いが、戦場でお前を守ってくれるかもしれない」

「分かりました」

美久は、いろいろな手に取って見ていた。中にはあまりの重たさで持ち上げることができない鎧もあった。

丸い金色の鉄板に蝶の模様が入った兜を手にした。その蝶から左右に飛び立つように、二本の刀が付随されている。

賢龍は門を開けて外へ出た。彼が率いる北山先鋭の騎馬兵が百騎、白馬をまたがる彼を先頭に、平地へ飛び出した。しかし、中山連合軍以下、兵は逃げて相手にしなかった。

北山軍は自分らの威光で逃げ惑っている、考えていた。それら怪しい動作の情報は、すぐに美久の元へ伝達兵が伝

えに集まってくる。

（おかしい、最大の兵力を誇る中山が、なぜ、相手をしない。おかしい……何かの……策だ）

戸板の裏側で潮平の声、

「美久殿、この戦い我々の勝ちですね。恐れをなして逃げ回っているとか。私の出番はなさそうですね。ああ、残念だな」

「そうであればいいのですが。何かイヤな気がしてならないのです。もう少し様子をみましょう」

美久は、再び伝達兵を四方八方へ走らせた。

「美久殿も心配性ですね。大丈夫ですよ。我々は琉球一の北山軍ですから」

と、潮平は流れる汗を拭いた。

しばらくすると、伝達兵が戻ってきた。それは、蟻が何か餌場を探しえていそぎ戻ってくるような動きで、すべてがガジュマルの大木の裏へ向かう。

その動きを、中山連合軍の青江は見逃さなかった。

「ふふふ、私達の策、逃げておびき寄せるものだが。その策を疑い、あそこに……間違はなく、指揮官が居る。軍師、美久に間違いない。覚悟しなさい」

青江は、あえて大君に連絡せず、自分で命令を下した。北

山を倒す策の実行よりも、憎い美久だけは自分で殺したいという衝動の方が勝っていた。

「さあ、軍師を殺せ」

急に、青江から馬を利用した伝達兵が、連合軍へと混じる。そして左端から二十騎ほどの騎兵隊が、馬の隊列を整え左へと旋回し始めた。

その様子は賢龍の目に入ったが、離脱した兵等だと思いついた。

その隊列は、美久が隠れている方角へ、すごい速度で向かった。

美久の周りには、潮平の率いる十人程の歩兵しか守りがいなかった。怪しまれないようにするためである。

そこを指して連合軍の騎兵隊が突進して来たのだ。

敵の隊列の変化に気がついた伝達兵が、美久へその事を伝えようとするが、矢が喉を突き抜けて止まり、その兵士は前に倒れた。

その生ぬるい血を顔面で受け、

「きゃー」

美久は悲鳴を上げた。

初めて目前で兵士が即死したのである。

「美久様！」

七、八人の守護隊が刀で騎兵隊と必死に戦っている姿が、納屋の板間から見えた。

「早く、お逃げください」

潮平は、閉じられた戸板の隙間から顔の半分を覗かせた。美久は、裏口の戸板を必死に探した。だが、恐怖で体が縛られる。

「何をしているんです。急いで、あっ」

と、板の隙間から、潮平の叫びが届く。

潮平は右腕に太刀を受けて膝を着いた。

「潮平殿！」

美久は絶叫する。

「美久様、早く逃げて……………」

潮平は再び立ち上がり敵の方向へ、

「ウォー」

潮平の姿は、敵兵で重なり見えなくなった。

「潮平殿！」

鉄同士がぶつかり、布が切り裂かれる音。断末魔の唸り。

美久は震えた。もう、ここには自分しか残っていないと。

納屋の木材が、刀で切り裂かれていく。刀先が幾度も差し

込まれ、戸板が破壊されていく。

（賢龍様、助けて……………もはやこれまで）

美久は胸元から小さな小刀を取り出し、自分の喉元に当てた。

板が外され、入ってきた兵士。美久はとつさに彼に小型刀を向ける。

「我は北山の軍師！ 北山のために」

喉にあてていた小刀を動かそうとした。しかし、その前に巨大な刀が美久めがけて下ろされた。

ガチツ

「ぎゃー」

美久は、地面に倒れ込んだ。

その振り下ろされた敵の太刀は、音を立てて跳ね返った。

彼女は、蝶の模様が入った兜かぶとを被っていたのである。一

瞬、敵兵も退いた。

（賢龍……早く）

小刀を美久は兵に向けて、目を見開いた。

横から入ってきた敵兵の一人が、美久の右手を蹴り上げ、

小刀は振り落とされた。

そして、外の広場へと引きずり出され、もう為す術が無かった。

後部の紐が切られ、兜が取り外された。

目前の兵士はその兵が女子であることで一瞬、躊躇するが、

大きく刀を振りかぶった。

青江から、その場で殺すよう命じられていたのだ。

その兵士の刀は、日の光を反射し煌めき、遠く、青江の目に映る。

その刀が降り下ろされれば、美久の頭部は、真二つに裂かれる。

「いやーっ」

両手を目の前に、咄嗟に素手で防ごうとする美久、断末魔の悲鳴を上げた。

美久の目の前の太刀は天に向いたまま、真横に倒れていく。

兵士の背中から腹部へ、長槍が突き抜かれていた。

「どけ、どけ」

後方から、北山軍の主力部隊が戻って来た。

敵兵は一斉に美久の反対方向を向いた。

「ほらほら、邪魔だ！」

北山軍の先頭を走る白馬に乗った賢龍の大声、さらには、追従してきた兵士らの声が響き渡る。

北山の主力部隊と青江の特別兵とが、美久の面前で戦い合った。

美久は、周りを北山の数十人の歩兵群で囲まれ、槍と刀を外の連合軍の騎兵隊へ向けられて保護された。

北山軍の兵士は必死に、軍師美久を守ろうとしている。遠く離れた場所でも、青江はそれらの推移を凝視している。ガジュマルの木の下での紛争を、大君は気がついた。

美久を狙っていた敵兵がばたばたと賢龍に倒され、馬に乗った騎兵等も劣勢になった。

「何を、青江はやっているのか。敵主力部隊をおびき寄せろ。策が、城壁内で何をあらそっているのか。引かせろ、あそこにいる連合軍の兵をひかせろ」

中山本陣から、太鼓が二度鳴らされ、伝達兵が走る。

やがて、青江率いる特別兵等は、その場から全て立ち去った。

賢龍は馬を降り、美久を抱きかかえて、そのまま本丸へと戻っていった。

本部平原はそれをじっと見ていた。

第一の城壁が閉ざされ、すべての北山兵が城内の奥へと戻っていった。

それを残念そうに見つめる青江の姿があった。

「もう少しいった、もう少し」

大君は青江を呼び戻した。

青江は、最前線に美久が指揮をとっていたことに気づき、緊急に対応したことを話し、もう一息だったと報告した。

一方で大君の怒りの声、

「何て事をしたんだ。もう少しで、この戦は終わっていった。策の変更は、重罪なるぞ」

「ええ、臨時で対応しました。あそこに、美久がいたんです。もう一息で、あの女の首を取れました。それで全てが終わりです」

「あれが、美久かどうか確信はないだろうが。あの時、もう少し北山軍をおびき寄せたかったが……その後の策、極秘の策を、お前に伝えておけばよかった」

大君は自分の頭を叩き、悔しがった。

「もうよい、さがれ」

大君の表情は複雑な感情が混ざったものであった。

「美久よ、強運も味方にしたのか」

青江は、二度も失敗したことで、大君の信頼が薄らいでいくのが心配でならなかった。早く手柄を立てねばと焦り始めていた。

「あの女、絶対に許さない。私の前に引きずり出し、ギザギザに切り裂いて、苦しませてやる！」